

## 国語科通信(3 学年)その1

話題の書籍から ～「不条理」という難解なことばの意味を～

令和2年4月24日

今、話題の小説『ペスト』(仏の作家 カミュ)を読み進めています。

『ペスト』は現在店頭での入手が難しいようです。運良く手に入れた手元の文庫本は88版(4月10日)、4月11日購入時、店頭最後の一冊でした。

『ペスト』は、1947年に発表されました。偶然ですが、先の現代文のテスト(短歌の問い)で「1947年に発表されたことをふまえて」というのがありました。が、同時代の作品になります。カミュは、10年後にノーベル文学賞を受賞します。

『ペスト』で描かれる内容は虚構です。架空の事件の記録なのですが、「実録」であるかのように引き込まれます。「ペスト」の感染症に襲われ外部と全く遮断された一都市の中で戦う市民の姿が、医師リウーによって語られるのです。抑制された(客観的、無感動、簡潔な)語り口(文体)です。

大したことはないと最初高をくくって自粛しない人々。恐ろしい感染症だとなかなか認めたがらない政治家。人々は事件当初、なかなか最悪の状況を想定しません。ペストから目を背けようとします。また、どうにかして脱出し、故郷に帰ろうとする旅行者、どさくさに乗じて逮捕の恐怖から免れ秘かにほっとする犯罪者なども登場します。現在の状況と重なります。まさに「あるある」です。

第二次世界大戦の記憶のまだ生々しかった時代、『ペスト』は熱狂的に人々に読まれたと言います。「ペスト」は、「戦争」や「ナチス」などの象徴であるこ

とが読み進めるうちにわかってきます。

突然、理由もなく日常が奪われる。「恐怖」「不安」「絶望」「追放」「別離」といった苦痛が万人を襲います。その中で、次第に人々は変容し、「連帯」によって「ペスト」と戦っていくのです。

「収束(終息)はいつに」、「コロナに打ち勝った証として…」という言説を幾度となく耳にする今ではありますが、作品の最後は次のように締めくくられます。

「市中から立ち上がる喜悦の叫びに耳を傾けながら、リウーはこの喜悦が常に脅かされていることを思い出していた。なぜなら、彼は、…ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもないものであり、…辛抱強く待ち続けていて、そしておそらくはいつか、人間に不幸と教訓をもたらすために、ペストが再びその鼠どもを呼びさまし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせに差し向ける日が来るであろうということを(知っていたからである)。」

2011年に起きた東日本大震災後、鴨長明の『方丈記』に注目が集まりました。抗うことのできない人間の「不条理」な状況の中で、私たちに、それでも生きていけよと静かに教え励まし、指針を与えてくれるもの、そのひとつに、ことばがあり、歴史があり、文学があり、人々はそれを求めるものなのだということをこの事実は示しています。

そうはいっても、さすがにノーベル賞作家の著した作品を読むことは容易ではありません。が、今読むべきものとして出会ったこの出会いに感謝したいと思います。もやもやとした読後感を反芻する時間も、「対話」の時間のひとつです。